

# 麦づくり情報 第4号

令和7年(2025年)3月21日  
佐賀県農業試験研究センター  
佐賀県米麦改良協会

## ◎農試作況試験における麦類の生育(3月19日調査)

品種	播種期 (月/日)	年次	草丈 (cm)	茎数 (本/㎡)	葉齢 (L)	葉色 (SPAD)	概況 (平年・平均と比較して)
シロガネコムギ	11/20	本年	38.1	878	8.8	42.0	<b>[気象]</b> 2月28日~3月20日まで ◆平均気温…平年並み (平年差+0.5℃) ◆日照時間…少ない(平年比64%) ◆降水量…多い(平年比153%)  <b>[生育]</b> ◆草丈 全品種・全作期において、過去10年間で最も低い。  ◆茎数 12/20播「シロガネコムギ」、12/2播「はるか二条」は平年よりやや少なく、その他は平年より多い。  ◆葉齢 11/20播「シロガネコムギ」は平年並み、その他は少ない(-1.0~-2.5L)。  ◆葉色 「シロガネコムギ」は両作期とも淡く、「サチホゴールデン」は両作期ともやや濃い。12/2「はるか二条」はやや濃く、12/20「はるか二条」は濃い。  ◆生育ステージ 茎立ち期についても全品種平年に比べて9日~15日遅く、生育が遅れている(次頁参照)。
		平年	61.1	676	8.9	44.7	
		平年比(差)	62	130	-0.1	-2.7	
	12/10	本年	23.2	648	7.0	43.6	
		平年	50.1	681	8.0	47.4	
		平年比(差)	46	95	-1.0	-3.8	
サチホゴールデン	12/2	本年	31.1	1274	7.6	40.1	
		4ヵ年平均	61.7	1034	10.1	39.5	
	12/10	前年比(差)	50	123	-2.5	+0.6	
		本年	29.8	1144	7.4	42.1	
はるか二条	12/2	平年	52.7	1035	8.9	41.4	
		平年比(差)	57	111	-1.5	+0.7	
	12/10	本年	32.2	924	7.7	43.6	
		4ヵ年平均	60.5	944	10.0	43.0	
12/10	前年比(差)	53	98	-2.3	+0.6		
	7ヵ年平均	55.5	890	9.0	43.3		
平年比(差)	58	113	-1.9	+3.3			

留意点

- ◆大麦において網斑病がみられる場合は、出穂期～穂揃期に薬剤防除を行う。
- ◆赤かび病の防除について  
小麦：開花始め～開花期（出穂期の約 7～10 日後）の防除効果が高く、さらに、開花 10～20 日後頃に 2 回目の防除を行うと効果が高まる。  
大麦：蒴殻抽出期（出穂期の約 2 週間後）の防除効果が高く、さらに、その 7 日後頃に 2 回目の防除を行うと効果が高まる。  
本病の発生が多い硬質小麦及び食糧用大麦「はるか二条」については、2 回防除を基本とする。
- ◆麦類生産物については、適正なタンパク質含有率の確保が極めて重要であることから、穂揃期追肥を施用し適正化を図る。

注意事項

- 1) 「シロガネコムギ」：苗立数について 11/20 播種は 120 本/m<sup>2</sup>、12/10 播種は 150 本/m<sup>2</sup>。施肥量は 10a 当たり窒素成分で 5.5-4.5-4.0 kg。平年値は収量が過去 7 カ年の内、収量が最高年と最低年の値を除いた 5 カ年分の平均。
- 2) 「サチホゴールデン」：苗立数は 150 本/m<sup>2</sup>。施肥量は 10a 当たり窒素成分で 6.0-4.0-2.0 kg。平年値について 12/2 播種は試験を開始した R3 年産から 4 カ年分の平均、12/10 播種は収量が過去 7 カ年の内、最高年次と最低年次の値を除いた 5 カ年分の平均。
- 3) 「はるか二条」：苗立数は 150 本/m<sup>2</sup>。施肥量は 10a 当たり窒素成分で 6.0-4.0-4.0 kg。平年値について 12/2 播種は試験を開始した R3 年産から 4 カ年分の平均、12/10 播種は試験を開始した H30 年産以降の 7 カ年の平均。

◎ 本年の生育ステージ

品種	播種期 (月/日)	年次	幼穂形成始期 (月/日)	節間伸長開始期 (月/日)	莖立期 (月/日 )	出穂期 (月/日)
シロガネコムギ	11/20	本年	2/3	3/1	3/5	未
		前年	1/26	2/11	2/13	3/24
		平年	2/2	2/19	2/19	3/30
		平年差	+1	+10	+14	—
	12/10	本年	3/5	3/17	3/19	未
		前年	2/14	2/20	2/24	4/1
		平年	2/21	3/1	3/4	4/5
		平年差	+12	+16	+15	—
サチホゴールデン	12/2	本年	2/13	3/12	3/14	未
		前年	1/29	2/16	2/20	3/28
		平年	2/6	2/23	3/2	3/29
		平年差	+7	+17	+12	—
	12/10	本年	2/18	3/13	3/16	未
		前年	2/2	2/20	2/20	3/31
		平年	2/12	3/3	3/5	4/3
		平年差	+6	+10	+11	—
はるか二条	12/2	本年	2/13	3/8	3/10	未
		前年	1/29	2/16	2/20	3/29
		平年	2/6	2/22	3/4	3/28
		平年差	+7	+14	+9	—
	12/10	本年	2/18	3/10	3/12	未
		前年	2/1	2/20	2/20	3/31
		平年	2/11	2/27	2/28	4/1
		平年差	+7	+11	+12	—

注 1) 平年値の算出方法については前頁を参照。

注 2) 1 個体当たり主茎及び生育旺盛な分げつ 2 本の計 3 本の幼穂を計測。節間長は根の付け根から幼穂の根本までの長さを計測。幼穂形成始期は幼穂長 1mm が 30%以上に達した時期を記載。節間伸長開始期は節間長 5mm が 80%以上に達した時期を記載。

## ○穂揃期追肥について

### 1. シロガネコムギ（穂揃期追肥）

4 月上旬に葉色(SPAD 値)が 40 以下の場合、子実のタンパク基準値が確保できないことが懸念されるため、**穂揃期に窒素で 2kg/10a 程度**の追肥を行う。

※R6 年度佐賀県施肥・病虫害防除・雑草防除のてびき<麦・野菜・花き・飼料作物>P3 より

### 2. チクゴイズミ（穂揃期追肥）

穂揃期の SPAD 値、穂数(本/m<sup>2</sup>)、4~5 月の降水量(mm)から、下記の推定式から、目標とする原麦タンパク含有率にに必要な穂揃期追肥量を推定できる。下表を参考にして穂数と SPAD 値から適切な量の**穂揃期追肥を施用する**。

推定式: $y=0.12 \times X1+194.27 \times X2-0.0018 \times X3+4.17$

y=原麦タンパク質含有率%、X1=穂揃期の SPAD 値、

X2=穂揃期追肥量(g/m<sup>2</sup>)/穂数(本/m<sup>2</sup>)、X3=4~5 月の降水量(mm)

表. 穂揃期の葉色と穂数がわかっている場合の穂揃期追肥量(Nkg/10a)の目安(目標タンパク含有率 10%のとき)

目標タンパク含有率		10%				
穂数(本/m <sup>2</sup> )						
SPAD	300	400	500	600	700	
34	3.5	-	-	-	-	
36	3.1	4.2	-	-	-	
38	2.8	3.7	-	-	-	
40	2.4	3.2	4.0	-	-	
42	2.0	2.7	3.3	4.0	-	
44	1.6	2.1	2.7	3.2	3.8	
46	1.2	1.6	2.1	2.5	2.9	

注) 登熟期間(4~5月)の降水量には平均値を利用 (品種:チクゴイズミ)

※R6 年度佐賀県施肥・病虫害防除・雑草防除のてびき<麦・野菜・花き・飼料作物>P53 より

### 3. はる風ふわり（穂揃期追肥）

パン用小麦に求められる原麦タンパク質含有率 12.5%以上を達成するためには、**出穂後 3 日頃に穂揃期追肥を確実に N5kg/10a 施用する**。

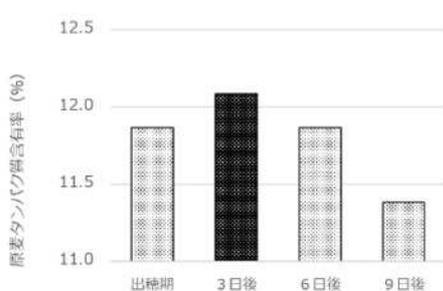


図 1 出穂後追肥の施用時期と原麦タンパク質含有率 (2017 年産)。(はる風ふわり)

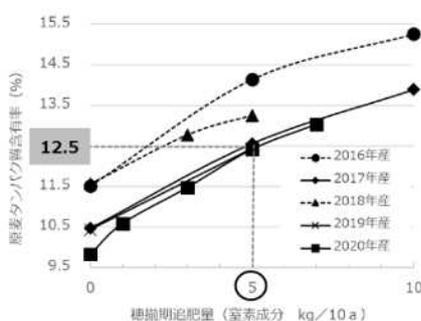


図 2 穂揃期追肥量と原麦タンパク質含有率 (はる風ふわり)。

※R6 年度佐賀県施肥・病虫害防除・雑草防除のてびき<麦・野菜・花き・飼料作物>P55 より

#### 4. さちかおり（穂揃期追肥）

穂揃期の葉身長(cm)×葉色(SPAD)から下記の推定式より原麦タンパク質含有率が推定できる。窒素追肥量と原麦タンパク質含有率には高い正の相関がみられ、穂揃期追肥は窒素1kg/10aごとに原麦タンパク質含有率が約0.4%上昇する。なお、慣行の基準施肥量において、原麦タンパク質含有率の許容値10.5%を確保するためには、穂揃期の窒素追肥を少なくとも6kg/10a以上施用する必要がある。下表を参考に穂揃期追肥を施用する。

推定式： $y=0.0043X+3.1654$

$y$ =原麦タンパク質含有率、 $X$ =葉身長×葉色

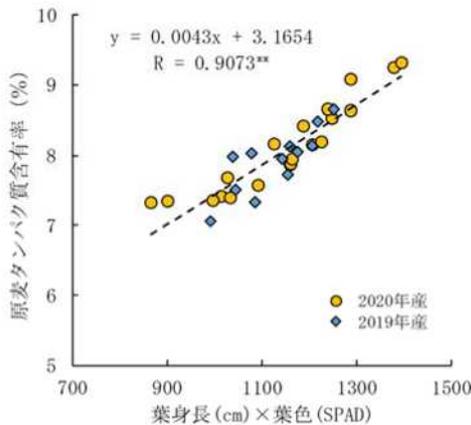


表. 葉身長×葉色値から推定した穂揃期追肥量のめやす

葉身長 ×葉色	必要施肥量(kg/10a)	
	硫安	(窒素成分)
1320	20	4.2
1220	30	6.3
1025	40	8.4
920	50	10.5

注) 葉身長はcm、葉色はSPAD-502PLUS測定値で算出。

図. 穂揃期における葉身長×葉色値とタンパク含有率10%のとき

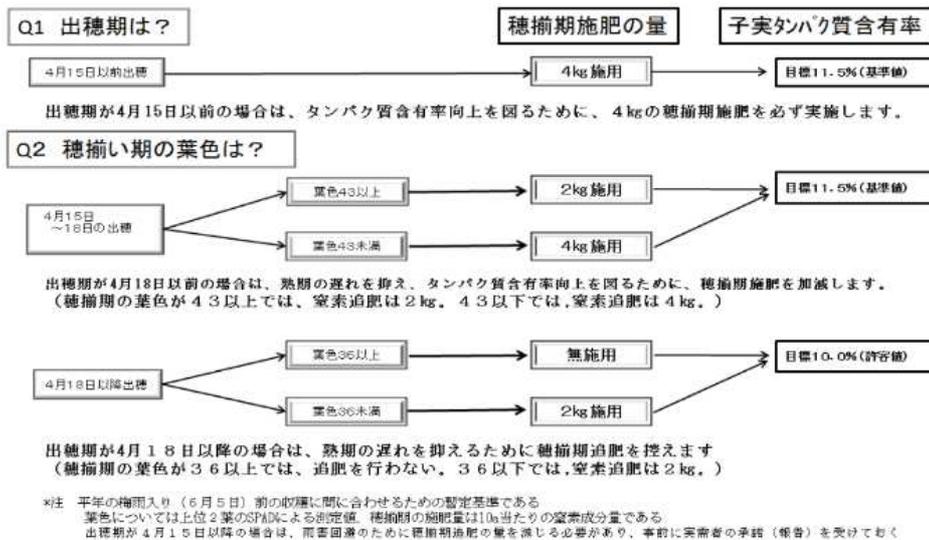
※令和2年度佐賀県研究成果情報(作成2021年2月)より

#### 5. ミナミノカオリ（穂揃期追肥）

下フロー図を参考にして穂揃期追肥を施用する。

##### 「ミナミノカオリ」の穂揃期施肥基準

「ミナミノカオリ」は熟期がやや遅く、穂揃期追肥による熟期の遅れにより病害を受けやすい。梅雨入りが早まると予想される場合は、以下の基準に沿って、穂揃期追肥を加減することにより子実タンパク質含有率の向上と病害の軽減が図ってください。



※R6年度佐賀県施肥・病害虫防除・雑草防除のてびき<麦・野菜・花き・飼料作物>P54より

## 6. サチホゴールデン

### 1) 追肥Ⅱで調節する方法

平成 22 年産、23 年産、24 年産の 3 カ年のデータから、3月上旬の莖数、葉色 (SPAD)、追肥量、2月の降水量を変数とした下記の推定式より原麦タンパク質含有率が推定できる。

令和 7 年 2 月の佐賀市月間降水量は 45mm。

推定式:  $y = -0.025 \times X1 + 0.001 \times X2 + 0.084 \times X3 + 0.281 \times X4 + 6.405$   
 $y$  = 原麦タンパク質含有率 (%)、 $X1$  = 2 月の降水量 (mm)、 $X2$  = 3 月上旬の莖数 (本/㎡)  
 $X3$  = 3 月上旬の葉色 (SPAD)、 $X4$  = 3 月上旬の追肥量 (Nkg/10a)

#### 「サチホゴールデン」の穂肥診断基準 (目標原麦タンパク質含有率 10.5% の場合)

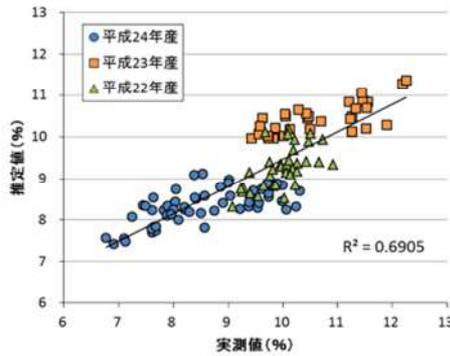


図 子実タンパク質含有率の実測値と重回帰式から得られた推定値との関係

2月の月間降水量 (平年値: 76mm)	3月上旬の葉色 (SPAD値)	穂肥施用量 (N成分/10a)
100mm以上の場合	葉色にかかわらず原則施用する	3kg*
50mm~100mmの場合	42以下	3kg*
	43~45	3kg
50mm以下の場合	46以上	2kg
	42以下	2kg
	43以上	施用しない

\*倒伏防止の観点から最大値は 3kg/10a とする

**本年産は窒素追肥で 2kg もしくは施用しない**

### 2) 穂揃期追肥で調節する方法

窒素追肥量と原麦タンパク質含有率には高い正の相関がみられ、穂揃期追肥は窒素 1kg/10a ごとに原麦タンパク質含有率が約 0.37% 上昇する。また、出穂期前 5~3 日の葉色または NDVI から子実タンパク質含有率の適正化に必要な施肥量を推定できる。下表を参考に穂揃期追肥を施用する。

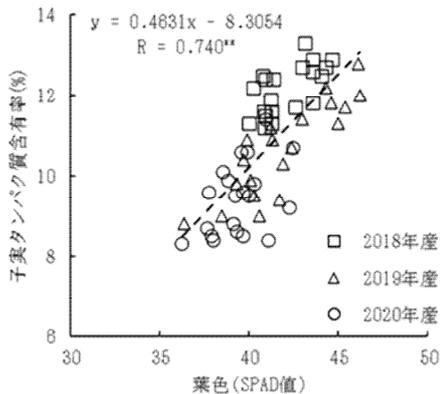


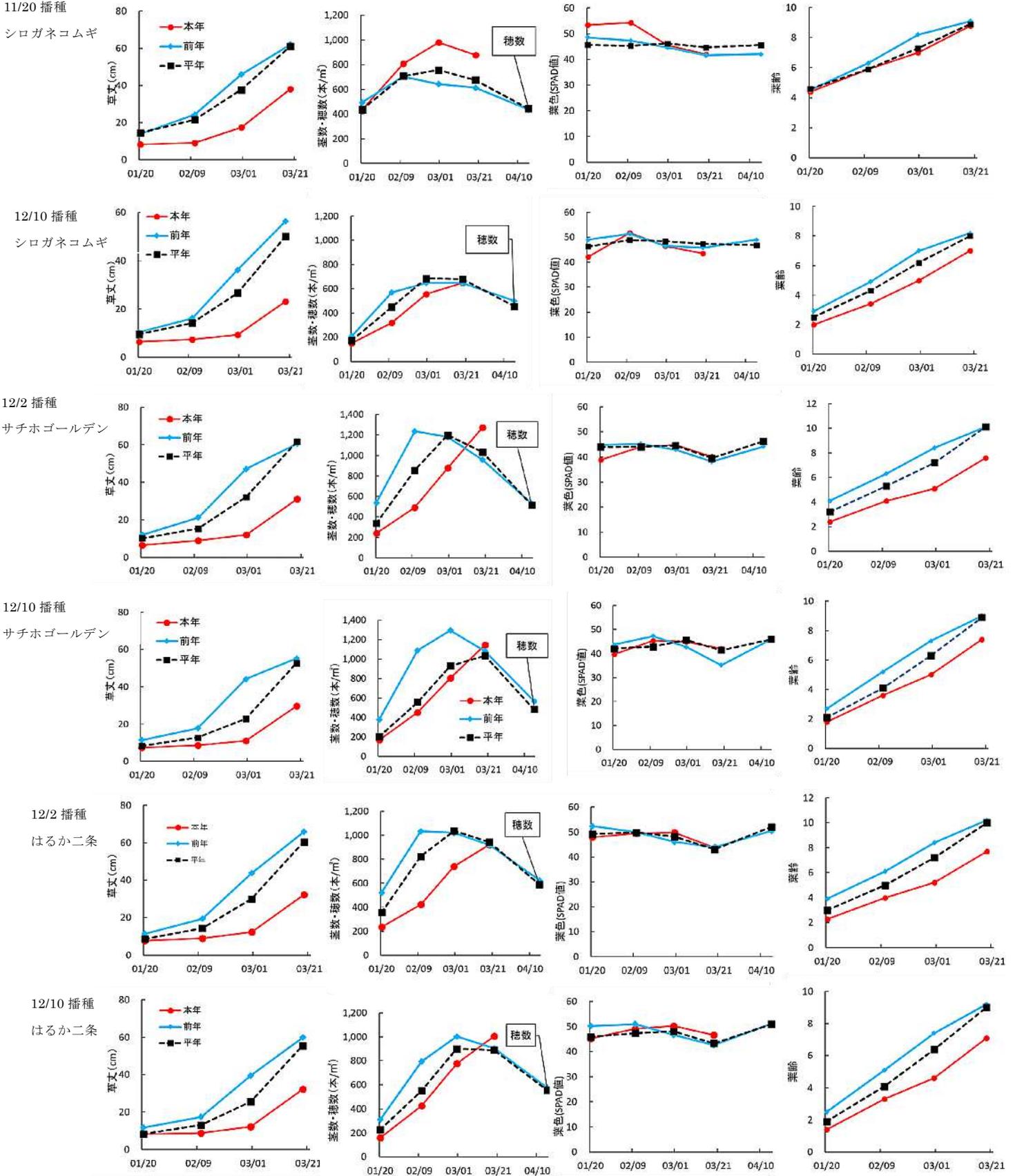
図 出穂期前 5~3 日における止葉葉色 (SPAD 値) と原麦タンパク質含有率との関係。

表 出穂期前 5~3 日における葉色 (SPAD 値) または NDVI による生育診断基準

出穂期前 5~3 日		追肥量
SPAD 値	NDVI	(Nkg/10a)
37 未満	0.66 未満	3.0
37~39	0.66~0.70	2.0
39 以上	0.70 以上	0.0

注) 葉色は SPAD-502PLUS (コニカミノルタセンシング社製) による測定値、NDVI は Handheld Crop Sensor 「GreenSeeker」 (Nikon-Trimble 社製) による測定値である。

## ◎生育状況の比較



## ◎赤かび病の防除適期について

麦種	予想される赤かび病の発生量	全茎数の40～50%が出穂した日							
		0	+5日	+10日	+15日	+20日	+25日	+30日	
小麦	少～並発生 並～多発生	出穂期		穂揃期	全茎数の80%が出穂した日(出穂期から概ね2～3日後)				
大麦	少～並発生 並～多発生	薬殻抽出期							

注1) 出穂期とは全茎数の40～50%が出穂、穂揃期とは全茎数の80%が出穂した日。

注2) 小麦の開花期とは40～50%の穂が開花した日。

注3) 大麦の薬殻抽出始めとは、50%以上の穂で薬殻が見え始めた日。

注4) 大麦で2回目の防除を行う場合、薬剤の使用方法(収穫前日数)に特に注意する。

注5) 矢印は防除適期を示し、農業は次表を参照とする。

## ◎大麦の薬殻抽出の模式図

(矢印の部分)

上から見た図



横から見た図



# 2025年産 麦作期間気象図 アメダス観測値(佐賀)

農業試験研究センター  
作物栽培研究担当

